



Title	大阪および周辺地区の悪性リンパ腫の特徴
Author(s)	青笹, 克之
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35524
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	あお 青	ぎき 笹	かつ 克	ゆき 之
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7 3 3 3	号	
学位授与の日付	昭和 61 年 5 月 12 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	大阪および周辺地区の悪性リンパ腫の特徴			
論文審査委員	(主査) 教授 松本 圭史			
	(副査) 教授 北村 旦	教授 北村 幸彦		

論文内容の要旨

〔目 的〕

近年の免疫学的検討により、従来形態学的にリンパ肉腫、細網肉腫、巨大ろ胞性リンパ腫等に区分されてきた悪性リンパ腫の大部分はリンパ球の腫瘍であることが明らかとなった。欧米では成人の悪性リンパ腫の大部分がB細胞性であるのに対し、日本ではT細胞性リンパ腫が多く、特に九州および南四国ではリンパ腫の $\frac{3}{4}$ 以上がT細胞性であると報告されている（成人T細胞白血病／リンパ腫（ATL汚染地域））。しかし大阪地区の悪性リンパ腫の特徴について明らかにした報告は現在までのところない。本研究では(1)新鮮材料を用いての免疫学的、酵素組織学的検討、(2)多数例についての組織学的検討を行った。その結果を日本の他地域そして欧米の報告と比較することにより、この地域の悪性リンパ腫の特徴を明らかにしようとした。

〔方 法〕

- (1) 免疫学的、酵素組織学的検討：1977－1981年に阪大病院および関連病院を受診した43例の非ホジキンリンパ腫につき検索し、膜表面形質、胞体内の酵素反応パターンにもとづきT、Bおよびnull細胞性に分類した。
- (2) 組織学的検討：1964－1983年に大阪府下および周辺の16施設で悪性リンパ腫および類縁疾患と診断された症例を生検台帳、臨床依頼用紙より抜きだした。組織包埋ブロックより標本の再作成ができたものは986症例であった。標本の再検討の結果、765症例が悪性リンパ腫として再診断されたが、その内訳は非ホジキンリンパ腫（NHL）684例（89.4%）、ホジキン病（HD）81例（10.6%）であった。NHLはKiel分類およびL S G分類で、HDはRey分類にもとづいて分類した。これらの症例では年

年齢、性別、腫瘍の位置（リンパ節又は節外）と数等の簡単な臨床所見が判明している。

[成績]

(1) 免疫学的、酵素組織学的所見：B細胞性27例（63%）、T細胞性11例（26%）、null細胞性5例（11%）である。部位別にみると節性ではB16例（73%）、T6例（27%）；皮膚をのぞく節外性ではB9例（60%）、T2例（13%）、null4例（27%）である。組織学的にはT細胞性のうち5例（45%）がL S G分類の多形細胞型であった。従来“細網肉腫”とされた症例の表面形質の内訳はB48%、T30%、null22%であった。

(2) 組織学的所見：

I. 非ホジキンリンパ腫一部位別では節性は379例（57.7%）、節外性278例（42.3%）である。27例は部位不明。節外性リンパ腫の中では消化管、Waldeyer輪のものが多く、58.6%を占める。性別では甲状腺リンパ腫をのぞき男性優位である。節性リンパ腫は60歳台にピークがあるが、節外性は年齢とともにその頻度が増す。組織学的にはろ胞性リンパ腫の頻度は節性で13.6%、節外性で6.9%である。ビマン性リンパ腫では大細胞性の頻度が高く節性で42.9%、節外性で63.3%である。Kiel分類はリンパ腫をその組織像より低悪性群（LGM）と高悪性群（HGM）に分類する。今回の症例でのLGMとHGMの頻度は節性で43%、57%；節外性で57%、43%である。亜型の中では小リンパ球性の頻度は節性で2.1%、節外性で2.6%である。L S G分類ではATLに特徴的とされる多形細胞型は全例の10%にみられた。

II. ホジキン病一部位別では1例（胃）をのぞき節性である。全体の性比はM：F=1.2：1、年齢のピークは50歳台にある。各亜型の頻度はリンパ球優性型（LP）16%、混合型（MC）39%、リンパ球減少型（LD）17%、結節硬化型（NS）28%であった。

[考察]

悪性リンパ腫中のT細胞性の比率は欧米では数%、日本のATL汚染地域では75%以上、非汚染地域では25-36%である。大阪地区の結果（26%）は非汚染地域のそれと一致する。組織学的には約9割がNHL、約1割がHDであり、欧米と比べてHDの頻度が低いのが特徴的である。NHLの中ではATLに特徴的な多形細胞型の頻度は約10%である。これらの症例はHGMとして経過する。又LGMのうち小リンパ球性および節性ろ胞性リンパ腫の頻度が2.1%、13.6%と低い（欧米では各々20.7%、44%）。このためNHLの中でLGMの頻度（43%）は欧米（72%）より低くなっている。HDの各亜型の頻度は欧米ではLP5-25%、MC27-42%、LD6-25%、NS26-52%であり、今回の症例ではNSが少なく、MCが多い傾向にある。

[総括]

1. 大阪地区の悪性リンパ腫は表面形質上、日本のATL非汚染地域の特徴を示す。
2. 欧米と比べて、全リンパ腫中のホジキン病の頻度が低く、又ホジキン病の各亜型の頻度も欧米と異なる。
3. 非ホジキンリンパ腫においては低悪性群リンパ腫の頻度が欧米と比べて著明に低い。

論文の審査結果の要旨

成人T細胞白血病／リンパ腫（ATL）の頻度は欧米では5%前後であるが、本邦では20%以上と高く、特にATLウイルス汚染地区である九州・南四国では75%以上と報告されている。現在までATLウイルス非汚染地区のT細胞リンパ腫の頻度を正確に調べた報告はない。

本論文はATLウイルス非汚染地区（大阪地区）のT細胞リンパ腫の頻度が26%と汚染地区と比べて著明に低いことを示した。更にこの地区の悪性リンパ腫は986例の検索により、欧米に比してホジキン病の頻度が低く、組織亜型の点でも相違すること、又、非ホジキンリンパ腫中の低悪性群リンパ腫の頻度が低いことを示したものである。日本の悪性リンパ腫の地理病理学に新しい知見を加えたものと判断する。